

藤並の森

Vol.21

高知県立文学館



●「花へ（高知市十市）」（写真提供／秀島信恵）

リレー随筆② 友情——今川 英子

林美美子に、「友情の行列」という随筆がある。亡くなる十年ほど前に書かれたもので、友情観を語って興味深い。

「友情」と云ふものは私にはどうしても信じられない。：現在、女同士の友情を得ていないことを、世間が心配してくれてゐるけれど、私は少しも自分を不幸だとは思つてゐない：

「無意味な妥協でお互いを傷つけあわない」という女の友情を信用しなかった美美子は、常に生身をさらして本音で生きてきた。それは人間の非情を知り抜いた美美子が、孤独の人生を自らに引き受ける覚悟の表明であったといえよう。

美美子の告別式の時、葬儀委員長の川端康成が、「故人は自分の文学的生命を保つため、他に対して、時にはひどいこともしたのでありますが、（略）死は一切の罪悪を消滅させますから、どうか故人を許してもらいたい」と、挨拶した。「ひどいこと」の実態は不明であるが、美美子ほどその人物評において、芳しくない噂が残されている作家

も多くない。

その一方で、面倒見のよかったことも語り伝えられている。例えば織田作之助没後は同棲していた輪島昭子を一年余り自宅に住ませ、印税が入るよう出版社に交渉した。太宰治の死後は、何かと親切に世話をしたことが、妻の津島美知子や、「斜陽」のモデルの太田静子からの書簡に窺われる。

かつて私は、晩年の美美子に可愛がられたという大原富枝に、美美子が後輩作家の足を引っ張るようなことがあったのかと訊いた。大原は、「同業者はみなライバルよ。作家は書いたもので勝負よ」と、毅然と答えた。

「私の『作品』を愛してくれる人のなかにこそ本当の友人を求めたい」との美美子の言葉どおり、通夜の枕元には同業者以外の女性たちが居並び、告別式には普段着の老若男女が長蛇の列を作った。

美美子の人物評は時間とともに風化し、純粋に作品だけが残っていく。

（近代文学研究者・

林美美子展監修者・東京在住）

◆次回企画展紹介◆

2003年9月14日(日)～10月19日(日)
 生誕100年記念

「林芙美子展 花のいのちはみじかくて…」

地にあり、今日にその縁を伝えていま
 す。
 ささまざまな人生体験を通し、庶民に生
 きる勇気を与える林芙美子の文学は、今
 日ますます見直されています。

昭和15年の初めての土佐来訪

さて、その林芙美子と四国・土佐との
 ゆかりですが、徳島に娘時代住んだこと
 や、昭和15年・16年の土佐来訪が挙げら
 れます。最初に土佐を訪れたのは昭和15
 年の10月、文芸院後運動講演会の講師と
 してでした。この時は浜本浩や高見順・
 横光利一らとともに海路をとり高知港か
 ら土佐入りし、五台山や高知城を散策
 後、現・追手前高校講堂で、戦時体制下
 に国民に呼びかけるかたちでの講演をし
 ています。当時の社会情勢や文学者の置
 かれた立場がうかがえます。

だが芙美子もまた戦時下で出版統制を
 受け、沈黙を余儀なくされた時期もあり
 ました。

祖谷溪谷を訪ね、

白地温泉で執筆

さて、昭和16年5月から6月にかけて
 は、鳴門から四国入りし、麦わら帽に下
 駄履きで札所参りもしています。この時
 は雑誌「婦人公論」連載の「扁舟紀行」
 の取材の旅でしたが、高知県境にも近い
 祖谷溪谷を訪ね、阿波池田の白地温泉に
 も十日あまり滞在し「旅人」めかくし風



林 芙美子 (1903 門司～1951 東京)

「花のいのち」の生涯

今も衰えぬ林芙美子人気

昭和5年出版されベストセラーになっ
 た『放浪記』や森雅之・高峰秀子出演で
 映画化された『浮雲』、原節子・上原謙出
 演で映画化された『めし』(ともに成瀬巳
 喜男監督)などの名作で知られる林芙美
 子の生誕100年記念展をこの秋に高知でも
 開催します。

「花のいのちはみじかくて苦しきこと
 のみ多かりき」——芙美子が好んで色紙

ああ二十五の女心の痛みかな
 遠く海の色透きて見ゆる
 黍畑に立ちたり二十五の女は
 玉蜀黍よ、玉蜀黍よ！
 かくばかり胸の痛むかな
 二十五の女は海を眺めて
 只呆然となりて果てぬ。
 一ツ二ツ三ツ四ツ
 玉蜀黍の粒々は、二十五の女の
 侘しくも物ほしげなる片言なり
 着い海風も
 黄いろなる黍畑の風も
 黒い土の吐息も
 二十五の女心を濡らすかな。
 海ぞいの黍畑に立ちて
 何の願いぞも
 固き葉の颯々と吹き荒れるを見て
 二十五の女は
 眞実命を切りたき思いなり
 眞実死にたき思いなり

林芙美子『放浪記』(新潮文庫・

平成十四年版)より

「鳳」といった作品も書いています。また後年、祖谷の狐を題材に「狐物語」という名の童話も書き遺しています。

「生きてゐてあやめのさかり極楽寺」

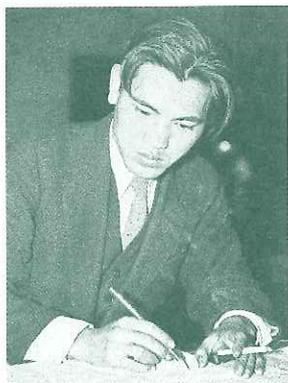
「麓まで二十里もある祖谷の雨」

「旅に寝てのびのびと見る枕かな」

はその折の「旅籠帖」に記された芙美子の句です。その中の「旅に寝て…」の句は、昭和62年、白地温泉小西旅館前に文学碑として刻まれ、当時の芙美子資料や写真とともに来館者の目を楽しませていきます。

画家今西中通と林芙美子

今年の3月から6月にかけて高須の高知県立美術館で、窪川町出身の画家今西中通（1908～47）の絵画が展示紹介されました。彼は昭和3年に上京後、上落合時代に、近くに住んでいた林芙美子・緑敏夫妻と親しい交際がありました。まだ修業時代でしたが、芙美子は「落合町山川記」の中で「有望な絵描きの一人に入れてい、独立の今西中通君」として登場させています。



今西 中通 (1908~1947)

また、芙美子が「放浪記」ほかの印税で、あこがれのパリへ行った折、夫緑敏あてに送った手紙の中にも「忠さんにもよろしく」など「忠さん」として登場させています。まだ若かった芙美子が、さらに若かった中通（二十二、三歳から二十五歳頃）の才能を見抜き、将来を嘱望していたこともうかがえ興味深いことです。

中通のほかにも、大原富枝がまだ無名時代の若き日、病気がちなのを芙美子が憂え励ましています。また、浜本浩とは銃後講演で同行していますし、漫画家の横山隆一とも昭和16年9月の満州慰問旅行で同行しています。

戦争疎開で角間温泉へ

長野県湯田中温泉郷の一つ、角間温泉には昭和19年から20年の敗戦まで疎開していた林芙美子の日々を紹介する「林芙美子文学館」があります。芙美子は雪深いこの地で、養子泰（たい）を育て、畑を耕し、そして細々と執筆を続けました。自分の着物をほどこいて泰のために芙美子が、縫い直した、幼子用の着物と羽織も今に遺されていて胸を打ちます。

今川英子氏講演会(9/14)

太田治子氏講演会(10/4)を開催

さて、この度の特別展「生誕100年記念 林芙美子」では、初日と後半に記念講演会を計画しています。まず初日には「林

芙美子巴里の恋」(2001年中央公論新社刊)の著者で「林芙美子展」監修者の今川英子氏に「林芙美子 パリの恋」という演題でご講演いただきます。1932年春、芙美子にも胸に秘めたパリの恋がありました。「放浪記」の作者としてのイメージがあまりに強い芙美子ですが、その後の人生行路にもさまざまな出会いがあり、心豊かな、しかし切ない想いをかみしめた日々もあったようです。

また10月4日には太宰治を父として持つ、作家太田治子氏のご講演「林芙美子さんの大いなる愛」を予定しています。太宰治は生前芙美子とも親交があり、治子さんは赤ん坊の頃、芙美子に抱かれ、また養女という話もあられた方です。絵画にもたいそう造詣が深く滋味あるお話が期待されます。

本企画展は、今は林芙美子記念館となっている生前最後の芙美子の住居を管理し、また膨大な芙美子資料を所蔵整理されている新宿区教育委員会および新宿歴史博物館、芙美子の生地・北九州市教育委員会、そしてご遺族の林福江様の特別協力、今川英子氏監修により生誕100年を記念して巡回開催するものです。

なお今回の高知展では、それらの巡回資料に加え、阿波池田町白地温泉小西旅館様のご厚意により、当地で執筆された芙美子の直筆原稿や短冊なども展示を予定しています。

<主な展示資料一覧>

- ・『放浪記』『蒼馬を見たり』などの初版本ほか主な著作
- ・芙美子の自筆「浮雲」原稿
- ・芙美子自筆の手帳「巴里の小遣い帳」
- ・パリで心をかよわせた白井晟一から芙美子へのメモ
- ・芙美子がパリで本人からもらい受けたフランシス・カルコの自画像
- ・芙美子の油彩画「自画像」「蓼科風景」「裸婦像」「角間風景」
- ・昭和13年秋、漢口従軍時使用のトランクや従軍時の手帳等
- ・川端康成や宇野千代からの手紙
- ・昭和15・16年の四国旅行関係資料など



また生前の林芙美子のインタビュー録音もお聞かせできるような準備をしています。ご教示ご協力下さった方々・機関に心より感謝申し上げます。多くの皆様のご来館をお待ちしています。(別役佳代)

ミニ企画展紹介

中村太郎写真展「宮沢賢治 幻想紀行」

7月20日(日)～8月31日(日)

「銀河鉄道の夜」「注文の多い料理店」「風の又三郎」などの作品で知られる宮沢賢治(1909～1933)。そのふるさと、岩手県花巻市です。賢治の数々の作品は、岩手の美しく厳しい自然のなかから生まれました。賢治の場合、風土との関係性は、比喩的表現ではなく、ずっと本質的なものでした。

「これらのわたくしのおはなしは、みんな林や野はらや鉄道線路やらで、虹や月あかりからもらってきたのです。ほんたうに、かしはばやし青い夕方を、十一月の山の風の中に、ふるへながら立つたりしますと、もうどうしてもこんな気がしてしかたないのです。ほんとうにもう、どうしてもこんなことがあるやうでしかたないといふことを、わたくしはそのとほり書いたままでです。」

賢治の生前唯一の童話集「注文の多い料理店」の序にはこう書かれています。

彼は自分の作品を「心象スケッチ」と呼びました。「常に手帳(スケッチ・ブック)だったという証言もある」と鉛筆(あるいは首から紐で吊したシャープ・ペンシル)をたずさえていて、しきりに山野を歩きまわり、好んで野宿もして、その間に目に触れた印象的な事物や、心に浮かんだことがらを、猛烈なスピードでスケッチした、ということが、何人もの人々によって伝えられている(ちくま書房「宮沢賢治全集8」解説)。もちろん、賢治の作品原稿はおびただしい推敲の後があることで知られており、自然の中で心に浮かんだことを「そのとほり書いたまで」だけではありませんが、岩手の自

然から与えられるインスピレーションこそが賢治作品を支える大きな要素であったことは間違いありません。

賢治は、実際の岩手県に重ね、理想郷「イーハトーヴ」を思い描きました。実にこれは著者の心象中に、この様な風景をもつて実在したドリームランドとしての日本岩手県である。そこでは、あらゆる事が可能である。人は一瞬にして氷雲の上に飛躍し大循環の風を従へて北に旅する事もあれば、赤い花杯の下を行く蟻と語ることもできる。罪や、かなしみでさへそこでは聖くきれいにか、やいてゐる(「注文の多い料理店」広告チラシ)。

その作品世界を理解するには、岩手の風土を肌で知ることが最も近道かもしれません。「まはりの山は、みんなたつたいまできたばかりのやうにうるうるもりあがつて、まつ青なそらのしたにならんでゐました(「どんぐりと山猫」というみずみずしい風景。日本の雪風を描いた文

学作品として最高のものと評される「ひかりの素足」や、「水仙月の四日」で描かれる激しい吹雪、「雪渡り」のような清冽な銀世界。これらもすべて岩手の自然が、賢治の想像力によって結晶した表現です。

今回の中村太郎写真展「宮沢賢治 幻想紀行」では、写真家・中村太郎さんが四季の岩手を旅して撮影した写真約70点(求龍堂「宮沢賢治 幻想紀行」収録)により、賢治の幻想的な世界を旅します。イーハトーヴの光と風をとらえた中村太郎さんの写真。そこからきこえてくる賢治の言葉に耳をかたむけてみてください。

(野中佐知子)

< 関連行事 >

- 7月19日(土) 14時～16時
プレ企画 朗読の会
「宮沢賢治作品を読む」
- 7月20日(日) 13時30分～14時30分
オープニング記念トーク
「宮沢賢治を旅して」
講師/中村太郎氏(「宮沢賢治 幻想紀行」写真家)
- 8月2日(土) 14時～15時30分
記念講演 「宮沢賢治と自然」
講師/鈴木健司氏(高知大学教授)
- 8月10日(日) 13時30分～15時30分
アニメ映画上映会「銀河鉄道の夜」(1985)

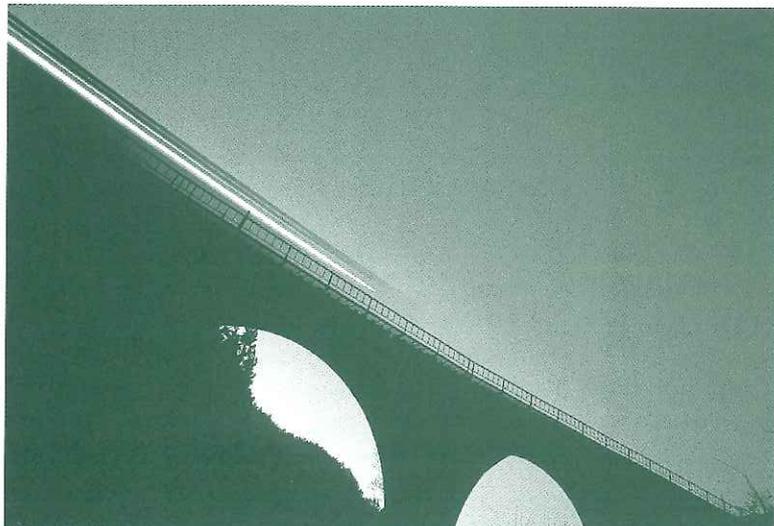
監督/杉井ギサブロー、脚本/別役 実、
原案/ますむらひろし、音楽/細野晴臣

特別企画

- 8月21日(木) 18時30分～21時
「宮沢賢治のディナー with ミニオペラ」

宮沢賢治の作品に登場する食べ物をごちそうにしてください。賢治の作品には、新鮮な西洋野菜や牧場のめぐみ、不思議なデザートなどがたくさん登場します。メニューは当日までのお楽しみ。ディナーの前には、高知市在住の作曲家・武中惇彦氏の作曲による、ミニオペラ「竜のはなし」(宮沢賢治作「手紙」より。約20分)を上演。

1. 開催日時
【日 時】 8月21日(木)18時30分から21時
(受付18時)
- 【場 所】 高知パレスホテル「ラ・フランス」
(高知市廿代町1-18)
- 【参加費】 8,000円(食事、飲物含む)
※後日、当日の演奏が収録されたCDを参加者全員にプレゼントします。
- 【定員】 70名(先着順)
2. ミニオペラ出演者
歌い語り・・・梅原ゆかり、ソプラノ
ヴィオラ・オブリガート (+パーカッション)
・・・武中惇彦
ピアノ (+パーカッション)・・・大野日菜
3. 申込方法
はがき、またはFAXに、住所、氏名、電話番号をご記入の上、文学館「賢治のディナー」係までお申し込みください。グループでお越しの方は、近くにお席をご用意します。



「銀河へ」 ©中村太郎

収蔵資料名品展 (4/29~5/15) 報告

■近世文人資料

江戸後期文化・文政期は、土佐においても学芸の分野に豊かな実りがあった。その一つが「土佐国職人歌合」であるといえるであろう。歌合を行う職人姿の絵に添えて、それぞれの職業に因んだ歌があり、判者が判詞を加えている。有職故実家・小谷正風の発案で、その門下であった西野時敏、楠瀬大枝、武藤平道らによって完成されたものと考えられている。この資料は、慶応3(1867)年に中山沼澄によって書写されたもの。土佐庶民の風俗を知る上でも貴重な史料といえよう。

大枝と交流のあった文人に、現・南はりまや町で書画と謡の塾をひらいていた島本蘭溪(らんせい)がいる。文化7(1810)年、土佐で初めて書画の展観(展覧会)が開催されるが、蘭溪は企画者の高田春塘(はるたけ)を助け、自宅を会場とした。

弟子の河田小龍(せいら)が描いた最晩年の蘭溪像や、天保3(1832)年に蘭溪が自宅



島本蘭溪家族肖像

宅で還暦祝いの書画会を開催した時に描いた自画像、土佐文人たちの寄書とともに蘭溪と京坂の文人たちの交流を物語る寄書などが出品された。

江戸から明治へと移り変わり、軍人でありながら文人としての姿勢を生涯とおした長屋重名(しげな)。寺田寅彦(たけひこ)の父・利正(としただ)や西南戦争で功績をたてた谷干城(たにのぼる)とも文雅の交わりがあったようである。息子・秋香(あきか)は日本画家であり、文豪・大町桂月(たけつき)と日本洋画の先駆者・国沢新九郎(くにさわしんくわ)は甥にあたる。今回の出品資料に桂月が詠んだ重名追悼の一連の歌がある。その一つ「書画と詩の三絶今の世には無しそれも君には皆余技にして」は、東洋の総合的芸術表現の理想である詩書画三絶という考え方が、重名が亡くなった大正4年頃には、既に過去のものとなっていたことを物語っている。

■田中貢太郎関係資料

「海は碧くたらたらと風いで磯には波が美女の呼吸づかいをしてゐる／沙の

はしうちして湯鱈かな」橙の花にほひけり磯の家」卒業の兎に書きやらん大愚の字」。短冊・色紙・軸とそれぞれ体裁は違いますが貢太郎自筆の俳句。他に、襖に揮毫した貢太郎俳句を額仕立てにしたもの、油彩の「田中貢太郎肖像」も紹介した。

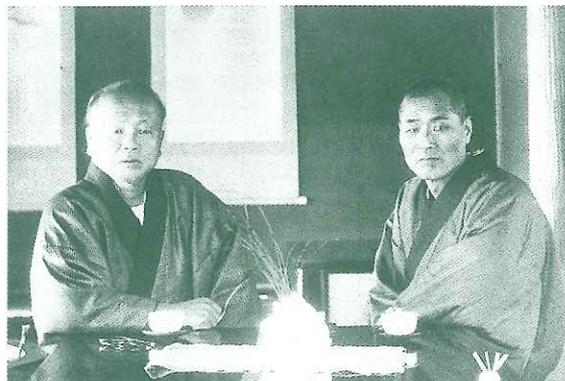
昭和15年2月に安芸で倒れ病床にある貢太郎のもとには遠く福島県東白河郡常豊村(現・埴町)の旧知の心友、金澤春友(はるとも)から見舞状が届いた。その金澤宛ての礼状(昭和15年5月)と「おまえも早く土佐へ帰ってくれ」との妻かずゑ宛て貢太郎書簡も紹介。16年2月1日没後直ちにその秋に金澤春友によって埴の地に建てられた「雪も風も避けよ由ある丘なれば」の貢太郎句碑は、句碑写真と金澤宛て田岡典夫の礼状にて紹介した。

■森下雨村関係資料

「新青年」初代編集長森下雨村(あめむら)は、海外探偵小説を紹介していたが、大正11年、投稿の平井太郎(ひらいたろう)作品と出会い、12年からは創作探偵小説の発掘紹介に努め、大正・昭和、そして今日に続く推理小説ブームの礎を築く。今回紹介した雨村宛て江戸川乱歩(らんぽ)書簡は、昭和28年秋の早川書房からの翻訳叢書発刊にも言及したものの、探偵推理物を愛読していたことも窺わせる。

他に乱歩の「うつし世は夢 夜の夢こそ まこと」という色紙や、馬場孤蝶(こてつ)長谷川天溪(てんせき)から森下宛て書簡も紹介。後輩のみならず師・上司からの信頼も篤かった彼の人柄を伝える。また雨村愛用の釣り道具や長い交友のあった中島及からの書簡なども紹介した。

「江の雨にま



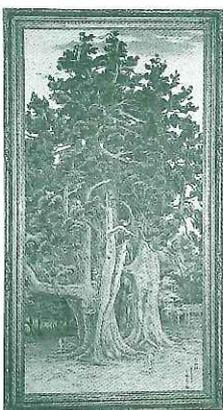
田中貢太郎と金澤春友

■上田秋夫資料

ロマン・ロランとも親交があった詩人上田秋夫(あきお) (平成7年没)の晩年のパステル画や詩稿は、この詩人の清雅な詩境と人柄をよく伝え好評を得た。

■油彩画から

片木太郎の「海の煙突」「海へ出る道(二人)」、高橋虎之助の「杉の大杉」なども出展。「杉の大杉」には「二千六百三年」と記す。1943(昭和18)年当時の生き生きとした大杉の姿を描き留め感動を誘った。



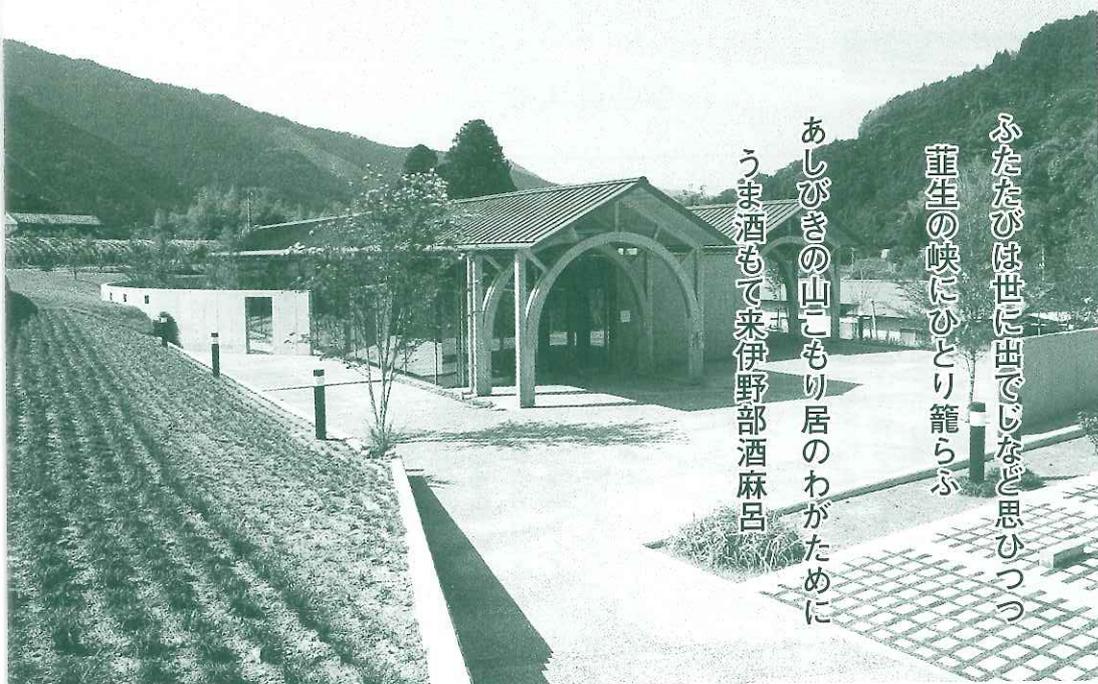
高橋虎之助画「杉の大杉」1943年

吉井 勇

つるぎたち土佐にきたりぬふるさとを
はじめてここに見たるここに

ふたたびは世に出でしなど思ひつつ
甞生の峡にひとり籠らぶ

あしびぎの山こもり居のわがために
うま酒もて来伊野部酒麻呂



吉井勇記念館

再生を期して

漂泊の歌人、吉井勇（一八八六—一九六〇・東京都）が流浪の果て、香美郡香北町猪野々に草廬溪鬼荘をもうけ隠棲したのは昭和九年十一月であった。それまで年毎に三回訪れていた一軒の鉱泉宿を「崖の上に立ちたる三間ほどの宿屋なれど、溪流を眼下に望み」「山里ながら艶なる風情棄てたきものなり」といたく気に入ってのことであつた。

隠棲に至るまでの勇は、身の置きどころのない放浪を繰り返していた。父の負債を引き受けたことによる家計の逼迫に加え、妻のスキヤンダル、さらにジャーナリズムのバッシング、友人の冷酷さ——と、そのさすらいは「流離のおもひに骨も瘦せける」もので

△死を思ひ留まりしもの書置はあはれなりけりなきがらのこと▽（「人間経」）
△膝抱きて歌をおもふは頸垂れて死を思ふより少し楽しき▽（「人間経」）

と胸の内を吐いた。これはもう、死の一手前である。
△かにかくに祇園はこひし寝るときも枕の下を水の流るる▽（「酒ほがひ」）
△一夜妻髪はななゆゑながきかとあやしみの若き日の遊蕩享楽派の情緒、歌柄は消え、人生の闇がしのび寄ってきたのである。

しかし人がそのどんづまりで癒やされるのは、昔もいまも、人情と自然。憔悴しきつた勇に手を差し伸べたのは、情味、俠気に富んだ三人の土佐人であつた。

永瀬潔は、勇に猪野々の地を紹介、今戶益喜は、猪野沢温泉二代目主人として勇を和ませた。瀧風醸造元伊野部恒吉は、勇にふんだんに酒を贈った。美術、文学のディレクターでもあつた彼は、勇とは大いに

ウマが合ったのである。

深山幽谷の気配にみちた猪野々の里は再生の場としては申し分なかつた。原始漂う無垢の地、魂の涵養地、と勇の眼にうつたにちがいない。

時おり歌行脚に出るほかは「四畳半と六畳のささやかなかやぶき屋根の家で一間には大きな炉を切つて、採つてきた木の枝を燃やした。たずねて来る部落の人たちを相手に酒を飲んだりすることもあつたが、多くはほんやり炉端に坐つて」のような日々を過ごした。

△寂しければ爐にあかあかと火を燃やしほのぼのとしての思ひ居り▽（「天彦」）
しかしただ、のんびんだらりと日々をやり過ごしていたわけではなかつた。西行、芭蕉、良寛、愚庵など、身ひとつで生きた先人の寒生涯、ともいうべきものに身を寄り添わせて、思索した。「芭蕉が『西行上人讚』で△捨てはてて身を無きものと思へども、雪の降る日は寒くこそあれ、花の降る日は浮かれこそすれ▽と云っているような心境」を草廬訓として、昭和十二年秋まで、籠居、再生を期した。

●吉井勇記念館オープニング

◎映像コーナー◎吉井勇の文学世界◎吉井勇の歌碑◎吉井勇の交友関係等テーマ別展示あり。五十メートル下段に溪鬼荘あり。土佐山田から物部川北岸回りは野趣横溢の道。

（国則三雄志）

見どころ◎アンパンマンミュージアム

●講の滝●大荒の滝

交通 通〓高知市より車で一時間二〇分

南国ICから車で五〇分

資料受贈報告

（平成十五年三月～五月）

敬称略

- ▼須田京介「毒入れ民部憑く」須田京介著刊
- ▼永野美智子「心の花つてどんな花」永野美智子、南の風社
- ▼横田晴光「絵の中のほくの村田島征三 くもん出版」他
- ▼高知こどもの図書館「よんどく!? 高知こどもの図書館編刊」
- ▼高知歌人社「歌集」老世紀 大原具視 高知歌人社
- ▼久保佐智「自由民権運動と女性」大木基子 ドメス出版
- ▼片岡文雄「龍詩集 1998 丸地守編 龍詩社」他
- ▼平和資料館「草の家」榎村浩詩集 榎村浩著・榎村浩の会編 平和資料館「草の家」
- ▼細川忠「句集」由 細川世志子
- ▼細川忠「句集」由 細川世志子
- ▼永国淳哉「国澤新九郎生誕地の碑を建立する会編刊」
- ▼杉本瑞井「釋道空 折口信夫筆墨と文学碑拓本 杉本瑞井・長高登共著 榎本神社」
- ▼片木英子「油彩画」海の煙突（三十号 一九八七年）
- へ出る道（二十号 一九九七年）
- ▼片木太郎作「片木太郎（一九二六—一九九九）は大正十五年高知市に生まれました。昭和二十六（一九五一年）年高知大学在学中、第五回展で水彩画「青の風景」で初入選。翌年から油彩画に取り組みようになり、その年の展覧に出品した「暗い風景」で初の特選を受賞しました。昭和二十九年高知大学教育学部卒業後、県立窪川高校、小津高校、追手前高校に教諭として勤務する傍ら創作活動を続けました。昭和三十年第九回展で「白い工場」が二回目の特選となり、昭和三十七年第十六回展

◆◆◆ 文学館日誌 2003年3月～2003年5月 ◆◆◆

3月

◆1日 「寅彦のディナー」。午後6時30分。高知パレスホテル2階(ラ・プランセス)にて。参加費5,000円。参加者40名。朗読：松田光代、野中久美子、ピアノ：大野日菜、シエフ：田中秀典、司会：金沢典子。【メニュー】いたどりとエスカルゴのバイ包み焼き&仔鴨のサラダ、やまもものドレッシングソース&うる目鯛のスモーク、えんどう豆のスープ、オマール海老のロティ、アメリカソース、土佐久礼産苺アスカルビーのタルト、ヴァニラアイス添えなど。◆2日 「愛の手紙展」記念講演会「一葉と『文学界』の人々」。講師：十川信介氏(学習院大学教授)。文学館ホールにて。参加者70名。◆4日 高知聾学校生徒7名。先生3名観覧。◆5日 西条市大町地区公民館30名観覧。◆6日 カルチャーサポーター交流会。前駐韓大使・寺田輝介氏ご来館。◆8日 第5回文学カレッジ(第5回目)「鹿持雅澄について」講師：榎原忠彦氏。参加者35名。◆15日 第36回朗読の会「弥生に花と雉と」。参加者36名。／「愛の手紙展」ギャラリートーク。午後2時。(担当学芸員による展示解説) 2階企画室。◆16日 「愛の手紙展」終了。期間中入館1,496名。◆18日 運営協議会参加者12名。◆29日 「語りと紙芝居の会」例会。

4月

◆5日 「語りと紙芝居の会」例会。◆6日 日本文学原作映画上映会第4弾「足摺岬」(1954年近代映画108分、原作・田宮虎彦)。解説「田宮虎彦と映画『足摺岬』について」講師：山川禎彦氏(高知文学学校

運営委員)。参加者99名。◆19日 第37回朗読の会「空の青に 木々の緑に そして鳥たちに 詩の心をささげよう」。詩人・小松弘愛氏、片岡文雄氏による自作詩朗読。参加者40名。◆22日 「北と南の民話交流のつどい」。福島県より民話の語り部・横山幸子氏来高。福島の民話を語る。あわせて土佐民話の会・市原麟一郎氏による土佐の民話の語りと、「語りと紙芝居の会」会員による紙芝居も。文学館ホールにて。参加者60名。



4/22 「北と南の民話交流のつどい」

◆26日 平成15年度専門講座「大町桂月人と文学」①講師：高橋正氏。参加者72名。◆29日 ミニ企画収蔵資料名品展開幕。5月15日まで。作家の肉声を聞く「森下雨林語る『推理小説今昔』」。翌30日も。

5月

◆2日 高知海洋高校ご観覧。生徒10名。◆3日 5日まで開館時間延長午前8時30分～午後6時。友澤清教氏他3名ご来館。◆7日 県人権研修10名ご来館。◆9日 県人権研修24名ご来館。◆10日 「語りと紙芝居の会」例会。茶室にて。◆15日 ミニ企画収蔵資料名品展終了。期間中入館472名。◆17日 第38回朗読の会。出演：須崎朗読の会。参加者38名。◆22日 NHK広島文化センター一行28名ご観覧。◆23日

ミニ企画「折口信夫短歌展」開幕。6月1日まで。杉本瑞井氏・長高登氏ほかご来館。竹本義明氏と土佐女子高生、折口展をご観覧。◆24日 専門講座「大町桂月人と文学」②参加者60名。



5/23 折口信夫短歌展を鑑賞する土佐女子高生たち

おしらせ

平成9年の文学館開設当初より、本県ご出身の安岡章太郎先生には、当館の名誉館長をお引き受けいただいておりますが、このたび名誉館長職を退任されることとなりました。

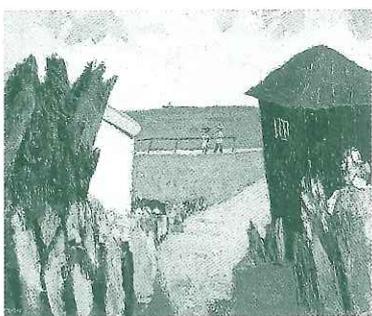
安岡先生には、これまで館の発展のために、ひとかたならぬご支援、ご協力をいただき、そのご厚意に深く感謝しているところで。

名誉館長職は辞されましても、引き続き、高知県立文学館のために、お力添えをいただきますようお願い申し上げますとともに、先生の今後ますますのご活躍をお祈りします。

で「赤壁」により三回目の特選を受賞し「無鑑査」となりました。そのあと昭和四十四年第二十三回展で審査員を務め以後招待作家となります。

昭和四十六(一九七二)年から平成九(一九九七)年まで三度に涉りフランス・イタリア・デンマーク・イギリスなどヨーロッパ各地に遊学し見聞を広めました。昭和四十三年第一回目の個展を開催。昭和五十八年には東京紀伊国屋画廊企画による作品展、また昭和六十二年には高知画廊で定年退職を記念しての自選展を開くなど平成七年までに七回の個展を開催しました。作品には道や建物など風景画が多く、素朴なタッチと鮮やかな色彩による詩情あふれる独特の世界は高い評価をうけました。高知県展理事、高知市文化振興事業団理事、高知医科大学非常勤講師なども務め平成八年には県展功労者表彰を受けました。平成十一年四月十一日に急逝。

このほか、全国の個人・関係機関の方々から数多くの資料をご寄贈いただきました。厚くお礼を申し上げます。



片木太郎画「海へ出る道(2人)」1997(平成9)年 油彩 20号F

高知県立文学館カレンダー

2003年

7～9月

7月—July

8月—August

9月—September

講座等

〔第6回児童生徒文学作品朗読コンクール〕

文学館では朗読を通して文学に親しむ子どもたちを育てたいという願いから、朗読コンクールを開催しています。各学校代表による朗読。地区審査を経た人たちにより県審査が行われます。

- ◇地区審査 県内3会場
8月20日(水)、22日(金)、24日(日)
- ◇県審査 高知県立文学館1階ホール
11月16日(日)
- 応募締め切り 7月31日(木)
- <お問い合わせ> 高知県立文学館
朗読コンクール係まで

日本文学原作の映画上映会第6弾!!

『黒い潮』 1954年 日活113分

■監督：山村 聡 ■脚本：菊島隆三 ■原作：井上 靖
■出演：山村 聡、東野英治郎、津島恵子、左 幸子、滝沢 修ほか

- 〔日 時〕 8月31日(日)
- ・第1回上映 10時～
- ・対談「『黒い潮』をめぐって(予定)」 12時10分～12時50分
猪野 陸氏(高知文学学校長)×堀見麻保郎氏(高知新聞論説委員)
- ・第2回上映 13時～
- ※なお、フィルムが古いため、画質・音声に一部劣化が見られます。ご了承ください。
- 〔場 所〕 高知県立文学館1階ホール
- 〔料金・定員〕 500円・各回100名(当日先着順)
- 〔主 催〕 小夏の映画会 (TEL:090-9453-0950)・高知県立文学館

ミニ企画展

中村太郎写真展 「宮沢賢治 幻想紀行」

7月20日(日)～8月31日(日)

<観覧料(常設展含む)>350円、
高校生以下無料

<関連行事> ※すべて無料、参加自由

- 7月19日(土)14時～16時
プレ企画 朗読の会
「宮沢賢治作品を読む」
- 7月20日(日)13時30分～14時30分
オープニング記念トーク
「宮沢賢治を旅して」
講師/中村太郎氏
(「宮沢賢治 幻想紀行」写真家)
- 8月2日(土)14時～15時30分
記念講演 「宮沢賢治と自然」
講師/鈴木健司氏(高知大学教授)
- 8月10日(日)13時30分～15時30分
アニメ映画上映会
「銀河鉄道の夜」(1985)
監督/杉井ギサプロ
脚本/別役 実

生誕100年記念

林芙美子展 花のいのちはみじかくて…

2003年9月14日(日)～10月19日(日) 一般550円(常設展含む)

<関連行事>

- ※展示解説を除いて会場は文学館1階ホール
- 今川英子氏講演会「林芙美子 パリの恋」
9月14日(日) 午後2時～
今川英子氏：近代文学研究者。本展監修者。
- 太田治子氏講演会「林芙美子さんの大いなる愛」
10月4日(土) 午後2時～
太田治子氏：作家。父・太宰治は林芙美子とも親交があった。
NHK「課外授業 ようこそ先輩」「ラジオ深夜便」等にも出演。
- ※各講演会への申込みは、館受付で、またはハガキに〒住所・TEL・氏名・講演会名をご記入の上、お早めに申込みを。応募多数の場合は抽選。
- 林芙美子作品による朗読の会
9月21日(日) 午後2時～4時
申込み不要・当日参加可。
- 展示解説(観覧券をお求め下さい。申込み不要)
9月14日(日) 講演会終了後、午後3時50分頃より 解説：今川英子氏
9月21日(日) 午前11時より 解説：当館学芸担当
10月11日(土) 午前11時より 解説：当館学芸担当
10月19日(日) 午後2時より 解説：当館学芸担当



企画展示室

【休館日】7月—7、14、22、28日 8月—4、11、18、25日 9月—1、8、16、22、29日

次回企画展

永遠のグリム童話展

「赤ずきん」「ヘンゼルとグレーテル」など世界中の子どもたちに愛され続けるグリム童話。その生みの親であるグリム兄弟の資料をドイツ国外で初公開します。

★11月15日(土)～12月21日(日)

利用案内

開館時間 午前9時～午後5時(入館は、午後4時30分まで)

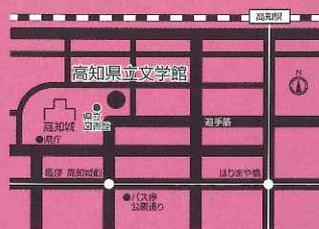
休館日 毎週月曜日(休日・祝日の場合はその翌日)
年末年始(12月26日～1月1日)

観覧料 一般350円
特別企画展のあるときは、料金が変わります。(一般550円)
20人以上の団体は2割引。高校生以下、高知県(市)長寿手帳所持者及び身体障害者手帳、療育手帳、精神障害者保健福祉手帳、戦傷病者手帳、被爆者健康手帳所持者とその介護者1名は無料です。

駐車場 なし。ただし近辺に有料駐車場があります。

貸出施設 企画展示室、ホール、茶室

交通のご案内



- 高知空港より空港バスではりまや橋下車徒歩20分
- JR高知駅下車徒歩20分
- 土佐電鉄電停高知城前下車北へ徒歩5分
- バス停公園通り下車北へ徒歩5分

高知県立
文学館

高知市丸ノ内1丁目1-20
電話 088-822-0231
FAX 088-871-7857
e-mail bungaku@tosa.net-kochi.jp
http://www2.net-kochi.jp/~kenbunka/bungaku/
〒780-0850